

トビウオ通信 (H21 第 9 号)

<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《平成 21 年度第 2 回日本海スルメイカ漁況予報》

当技術センターをはじめとして北海道から長崎県までの水産研究機関と独立行政法人水産総合研究センターが協議し、日本海区水産研究所がとりまとめた第 2 回日本海スルメイカ長期漁海況予報（平成 21 年 7 月 22 日付け）が発表されました。今回はその内容を基に島根県沖の漁模様を検討します。

スルメイカ漁況の今後の見通し（予報期間 8～12 月）

日本海西部（日本海区水産研究所発表）

- 漁期・漁場：主に 11 月以降の産卵南下群が漁獲対象となる。
- 来遊量：昨年並み。近年平均を下回る。
- 魚体の大きさ：前半は近年平均より小さい。

日本海沖合域（日本海区水産研究所発表）

- 漁期・漁場：大和堆付近の海域を主体に 8～9 月を中心に漁場が形成される。
- 来遊量：昨年および近年平均並み。
- 魚体の大きさ：前半は近年平均より小さい。

島根県沖

来遊量・漁況とも昨年・近年並みで推移する。

※近年：過去 5 年間（2004～2008 年）

漁場一斉調査によるスルメイカの分布状況

平成 21 年 6 月下旬～7 月上旬に日本海区水産研究所および各県の水産研究機関により日本海全域においてスルメイカの漁場一斉調査が実施されました。図 1 に釣獲試験によるスルメイカの分布量を CPUE（釣機 1 台 1 時間あたりの採集尾数）で示しました。

【分布状況と大きさ】

日本海の沿岸域では北部では外套背長が 17～18cm 台の小型個体が多く、西部では 16 cm 台以下

の小型個体が中心でした。また、CPUE をみると、日本海北部及び西部とも分布密度は比較的高い傾向にありました。

日本海の沖合域では、外套背長が 21cm 以上の個体の比率が沿岸域と比べて高かったものの 23 cm以上の大型個体は近年平均よりも低い傾向にありました。また、CPUE は大和堆を中心に 30 前後と比較的分布密度は高い傾向にありました。

【分布量から推定された資源水準】

今年のスルメイカの分布密度を示す CPUE の全調査点の平均は 18.2 個体でした (図 2)。この値は昨年の値(21.1 個体)の 87%、過去 5 年間の平均値(15.3 個体)の 1.2 倍でした。このことから、今年の本州海におけるスルメイカの資源量は昨年・近年並みの水準と推定されます。

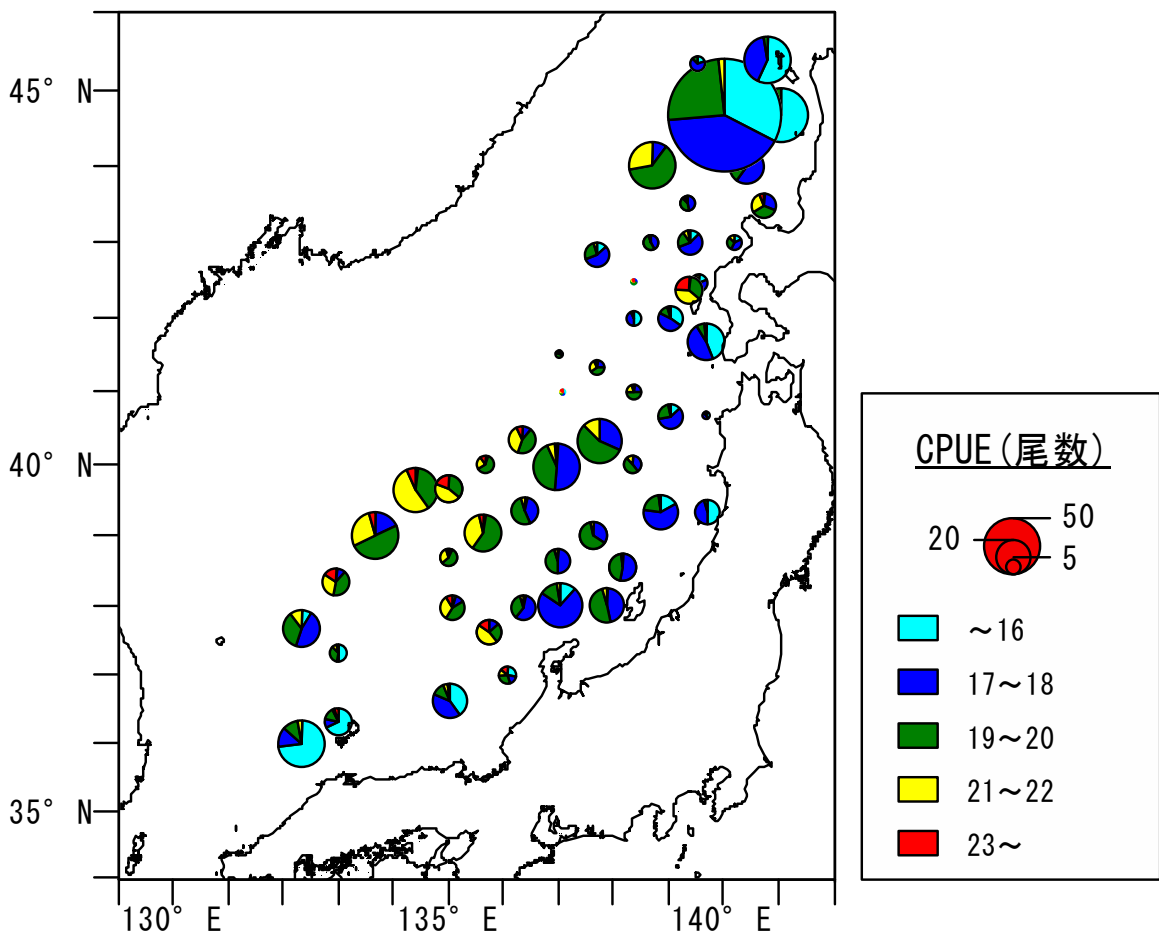


図 1 漁場一斉調査によるスルメイカの分布状況(資料:日本海区水産研究所)
●の面積は各調査点における CPUE を示し、色は外套背長の範囲の比率を示す。

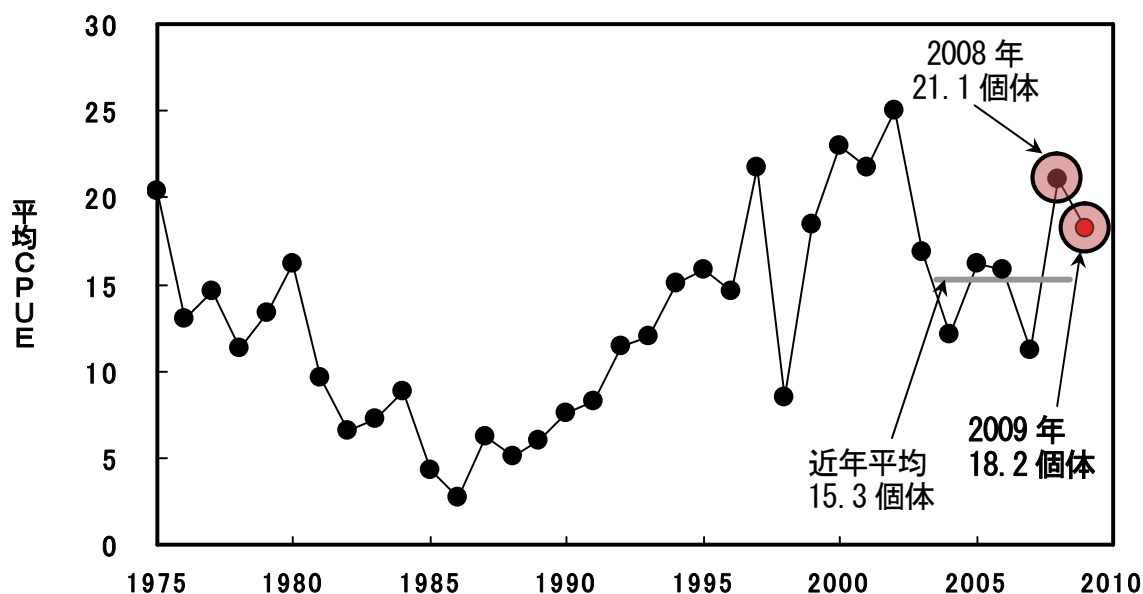


図2 漁場一斉調査における平均CPUE（釣機1台1時間あたりの漁獲量）の経年変化(太線は近年平均を示す) 資料:日本海区水産研究所

今後の島根県沖での漁況

スルメイカは前年・近年並み

県内の主要3港（浜田、恵曇、西郷）に水揚げされた小型イカ釣（5トン以上30トン未満）によるスルメイカの月別の漁獲動向を図3に示しました。今年の7月までの水揚量は370トンで、近年・前年に比べて極めて低調に推移しました（近年比：23%、昨年比：21%）。今年当初から韓国東岸の海水温が高めで経過し、かつ、対馬暖流の沖合域の流れが強

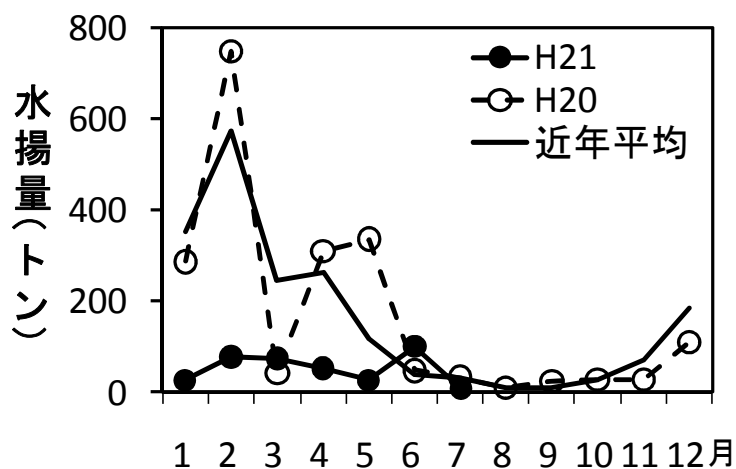


図3 主要3港における小型イカ釣り漁業によるスルメイカの漁獲動向

かったため、冬生まれ群の島根県沿岸域への来遊量が少なかったこと、また、沿岸域の海水温が高めで経過したため、秋生まれ群の北上時期が早まり、島根県沖への来遊（漁場形成）が短期間に留まったことから県内への水揚量が低調であったと考えられます。

前述のとおり日本海全域におけるスルメイカの資源量は昨年・近年並みと判断されています。従って、島根県沖への来遊時期である10月以降の来遊量・漁況とも昨年・近年並みといえるでしょう。